

Ⅱ分野 第5分科会

障がいのある人の人権

司会者 守本 明範 白木 誠一

記録者 松岡 和哉 守山 幸子

報告者Ⅰ 岡部 実穂

(共生社会に向けて、主体的に生きていくための基礎づくり～交流教育とオペレッタの実践を通して～)

報告者Ⅱ 谷口 美穂

(人権感覚を高め、ともに生きる心豊かな子の育成～人権感情を高め、互いに認め合う仲間づくりを目指して～)

報告者Ⅲ 中谷 秀子

(福祉施設職員になって思うこと)

研究討議の概要

<報告Ⅰについて>

司会者 ご質問のある方

西播 オペレッタのを見て小学校中学校相手校がどう学習が深まったとかいう話とかエピソードとかあったら教えてください。
報告者Ⅰ 自分たちも小野特の子たちみたいに部活とか勉強とかを頑張ろうっていう風に勇気づけられて頑張ろうと思った感想をいただきました。

司会者 学校以外のところで地域の子どもたちと小野特支の子どもたちと交流みたいなものが生まれたのでしょうか。

報告者Ⅰ 正直なところそこまではまだいっていないのが現状です。本校の子どもたちのことを知ってもらって、そういったことが本校の子どもたちの将来的な人権を守ること、それから地域で生きていくことにつながってと考えています。今はまだ畑に種をまいて耕している状態です。

司会者 交流先の学校の先生たちの協力はどうか。

報告者Ⅰ 最初に交流に行く前に相手校の先生方も本校の子どもたちのことについてあらかじめ知っていただくことが大事にな

ってきています。職員会議等で本校の子どもたちの特性の情報を伝えています。全校朝会若しくは学年集会等で子どもたちを紹介する場所を設定してくださっていることが一つ。子どもたちが授業に入っていくやすいように先生方が子どもたちに声を掛けてくださって子どもたちからも声を掛けてもらって交流することができるようなことになっています。

司会者 家に帰った時のつながりはどうですか？地域の小学校の先生方がそこでどうつながうと試みてはるのか、もしもそのような試みがあれば。

播磨 本校を取り巻く状況もここ数年で変わっています。放課後にアフターとかあって、地域のそれぞれの場、おうちの中や外で遊ぶのではなくて、いったん放課後アフターのところに行くケースの子どもさんが多いです。その中には他校の生徒も交じっていたりします。具体的にそれぞれの学校の先生同士では、その学校の中での活動の打ち合わせを必ずどんな授業にどのように参加するのか打ち合わせをしています。家に帰ってからの生活でのつながりというのはその子たちがその場所に置かれている環境の中でうまくことやっていると思います。

司会者 夏休みなど長期休業中については。
播磨 夏休みも今年私たちの学校では、放課後アフターの場所、それぞれの学校、いくつかの施設のところに教師全員が散ってどんな風にしていますかと見に行かせてもらっています。感覚ですけど、小学校の低学年の頃の時から地域の学校に顔を出している子どもたちというのは地域の中でもよく分かってもらっていて、村や町の中で声を掛けたりするということは聞くこともあります。

淡路 特別支援学校へつながってきた子どもさんたちの就学についての親御さんとか就学についての経緯を学校の先生方はどのくらい聞いておられますか。悩んだ末で行先を決められたと思うんですけど、そのあたりの経緯は学校の方ではどれくらい共有され

ているのかお聞きしたいのです。

播磨 教育支援委員会というのがあって、小野市の中ではこの就学に向けて次の4月に入る子でしたら夏休みくらいにかけて1学期に情報を集めたことを精査して就学先どこが妥当かというのを話し合う場があります。また、小野市では発達支援室というのが稼働しておりまして、在学中の子たちもそうですけど、お家の方とそういった療育的なこととか発達支援につながるというのもあります。4月の時点では、この進学先でよかったと思ってもらえるような決定になるように努力はしています。学校は主に観察とか様子を見たり、保育所、幼稚園の先生の中での保護者の意見を吸い上げ、行政側としては、発達検査の結果からそういったことについての意見をまとめ総合して判断するようになっています。保護者の意向も踏まえ、毎年毎年行われますので転籍という事柄になる生徒さんも出てきています。だから毎年この子次の進路先、あるいは学籍をどちらにするのか検討するようなシステムになっています。

阪神 普段の交流学級は小学部と中学部とどれくらいの頻度で交流をされているか教えてほしい。

報告者Ⅰ 中学部の方が学期に1回づつ行っています。小学部の方はもう少し何回かのスパンに分けています。大きな違いは行く回数と行く時間です。

淡路 オペレッタを見ながら舞台の上で演じているのはやっぱり障害のある子どもたちで、今後、共生社会として共に学ぶということであればその舞台の上で障害のあるないに関係なく共になんか創りあげて演じたり、何かオペレッタ以外で計画されていますか。

報告者Ⅰ そのオペレッタの舞台に関しては、他の小学校とか中学校の子は一緒にという感じでなく、本校の子どもたちが創りあげる、本校の子どもたちの姿を観てもらっているふうなことでしています。例えば他の小学

校とか中学校がゲストステージをしてくださって一緒にふれあいフェスティバルの催しをすることで共に創りあげていくことは考えられます。

淡路 交流のなかで進路先について、疑問とかそんな感じたことどうですか。

報告者Ⅰ しんどそうに感じる場面はあります。十分に活動できるような力を持っている子はいます。小学校とか中学校とかで本来持っている力を発揮できなかったりとか、自信をなくしてしまっただ殻を破れない子どももいます。本校に来てリーダーになって全校生徒の前で発言したり、生き活きとしている姿を見せるなど変わっている様子が見られこっちに来てよかったと思う場面がたくさんあります。

播磨 子どもたち同士がとにかく交流することはとても大切と私は思っております。

但馬 地域の人たちのとの交流っていうようなことはどうなんでしょうか。

報告者Ⅰ 小野市の企業の方がクリスマス会でいろんな催しをしてくれたりとかそういったことはあります。本校の子どもたちについて知ってもらい理解を深めていくことを今おこなっているところです。

但馬 オペレッタどれくらいの期間練習するのか。

報告者Ⅰ 毎日2時間程度練習を1カ月くらい。

<報告Ⅱについて>

淡路 子どもたちには通常学級、特別支援学級、そして通級教室等多様な学びの場があるということが書かれています。例えば障害のある子どもさんは通常学級にも籍を置き、特別支援学級にも籍を置いているとか。例えば評価を一緒にしているとか別にしているとかもうちょっと詳しく教えてほしい。障害者事業所との交流をする前に学校の中で一緒に育っている子どもたち同士での交流、学び合っているのがどんな形になっているのか教えていただきたい。

報告者Ⅱ 同じ学年の友だちと一緒に勉強しています。主に国語と算数については特別支援学級で学ぶことが多いですけども、その他の授業については全て交流学級で共に学んでいます。総合的な学習については特別支援学級の在籍している子どもたちも通常学級の子どもたちと一緒にいろんなところで一緒に関わって学ぶ場となっています。

淡路 別のところで学ぶ時にクラスの子どもたちに通常学級の子どもたちにはどんな説明をしているのか。

報告者Ⅱ 4月の職員会議で共通理解します。それぞれの学年に応じた形で1年生から6年生まで特別支援学級で学ぶなかよし学級についての理解が深まるよう4月の段階で子どもたちにも先生方から話をさせていただくようにしております。特別支援学級で学ぶ内容に応じて交流学級で共に学習することもたくさんございます。

但馬 発達障害についての理解を深めること、障害のある子やない子を含めてそうした理解を進めるのをどういうふうに進めていったらいいのかといろいろ悩んでいます。発達障害についての理解を深めるやり方もあれば教えていただきたい。居住地校交流をしていたら教えていただきたい。

報告者Ⅱ 発達障害は小学校段階で一緒に交流するなかで分かることは難しいです。発達障害ということについてこんな障害があるのはこうだとかという内容での学習については小学校段階ではなかなか進められていないのが現状です。居住地校交流は本校でもおこなっています。運動会、音楽会等も一緒に見に来て体調が許すのでありましたら子どもたちと同じテントに入って一緒に観覧していただくことで交流につながっています。

淡路 学習のベースは特別支援学級なのか通常学級なのか。開級式をどの時期にやっているのか。どの時間にやっているのか。始めたきっかけは何だったのかとか。たつの市はいろんな学校でこういったことをおこなっ

ているのか。1年間どのようなことを学びどんな自分になりたいかを発表するっていうのを特別支援学級、開級式とする意味をもう少し詳しく教えてほしい。

報告者Ⅱ 本校でも学びのベースは通常学級に置いております。開級式の時期はだいたい4月の早い時期に設けています。時間はお昼休みに掛けておこなうようにしています。たくさんの先生とそこに保護者も参加することにより、みんなで見守っていくという雰囲気作りをしています。きっかけは特別支援学級を再開する時に特別支援学級でこんなことを学んでこんな自分になりたいことを保護者と共有し、特別支援学級へ入ったことを前向きに考えられるようにしています。3月には閉級式を設けて1年間特別支援学級でどんな経験をしてどんなことが自分でできるようになったのか発表する場も設け1年の締めとなっています。

淡路 1年1組、1年2組、なかよし学級と廊下を歩いていく時に誰が見てもここは特別支援学級と分かるのは果たしてどうのかと感じます。学級名について意見をどなたでもいいので伺いできたらと思います。

報告者Ⅱ 新宮小学校でもなかよし学級と紹介しましたが、通称であって全部担任名としています。

阪神 小学校で障害のある子どもたちの支援はすごく手厚いと感じています。小学校から中学校へ進学する際、高いハードルをこの子たちは越えなければならない。進学に向けて小学校の先生たちは中学校に対してどんなアプローチしているか、小学校の役割はどのようにお考えしているか教えてほしい。

淡路 過去の内容ですが、小中学校の進路先の先生に様子を見たり、また、小学校の先生が時間をみて、中学校に行き何回かやって、スムーズに中学校に進学できるようにしたことがあります。中学校は教科担任制で先生方もいろんな人が変わるので本人にとってものすごく大変です。一緒に育つことが大切で、小学校から中学校への橋渡しは連携を取

ってやっていかないといけないです。

司会者 報告のなかで、「インクルーシブ教育の考え方は障害の有無に関わらずみんなが授業の内容が分かり」の部分で、「みんなが授業の内容が分かり・・・」そこに拘るようであれば、共に学ぶなんてことは永遠に難しいというふうに思います。内容の理解ということにこだわるよりも、どんな工夫や手立て合理的配慮を提供すれば、障害のある子が共に授業に「参加」できるのか、共に学ぶ場を作っていくことを進めてきました。

阪神 親と療育と教育の連携があれば私はある程度、親がこうさせてやりたい子どもがこうしたいということが、少しでも実現できると思います。小学校からこんな子どもが行くことを中学校、特別支援学校に伝えると子どもは生活が一からしやすいと思います。淡路 「ふしぎなともだち」たじまひろゆきさんの絵本の紹介。子どもの力を信じて、子ども中で子どもは育っていきます。同級生たちが一緒に育った人たちが支えあっていくことがあります。子ども同士で育ち合い同級生は有難いです。

〈報告Ⅲについて〉

(司会者) 質問、感想意見も合わせてお願いしたい。

(たつの) 孫が染色体異常で生まれた。自分では喋られない、食べられない、自力では歩けない状態。現在小学校3年生だが地元の小学校に受け入れてもらっている。昔では考えられない状況だがこれはまさに先人の努力のおかげだと思いありがたいと思う。そういう嬉しさがある反面で今は小学校に通っているが中学校に上がる時にはどうなるのか、卒業後、また今後社会に出る時にどうなるのか不安を感じる。

(淡路) 淡路でも医療的ケアが必要な方で普通の小学校に通い、その後中学校を経て神戸の夜間の高校に4回受験して合格された方がいる。淡路から神戸の学校への通学は母親が送迎をされている。本人は毎日行きたい気持ちが強く母親が頑張っておられる。母親は

大変そうだが嬉しそうに笑っている。今後は移動支援など社会資源を活用することができないか等、課題だらけだが頑張っておられる方がいる。

(淡路) 毎日新聞に「心の扉を開いて共に生きる兵庫」という記事があり前述の高校生の記事が書かれている。受験では定員内にも関わらず落とされた。本人はその学校に行きたい強い思いが有り何度も受験した。3度目の受験の際合格発表に行くと私服警官が何人もいた。警察を入れての学校の対応に障がいのある人やその応援している人たちを暴徒扱いしているかのようだった。その学校はだめだと思い別の学校を受験し合格した。重い障害のため自分の意思伝達もわかりにくい中でも自分はみんなと一緒に学校に行きたいという気持ちを持ち続けていた。そういう気持ちを多くの方が支援してくれた。今は高校で新しい道を切り開いている。道を切り開くことはそれまではとても大変なことだが開いていくと簡単に開く。例えば学校にエレベータを設置する事、金銭面などで言われたが一旦設置されるとほかの学校にも次々設置されていく。そういう部分で高校の進学などの道も切り開けていったらとを感じる。

(司会者) 小学校、中学校の学齢期には色々あってもまだしっかりとした教育、指導、寄り添いがあるがそれ以外の場面で不安も抱える中で、今回の事業所の発表で考えさせられる部分が多くあった。

(司会者1) 障害者施設での65歳問題はどのようにクリアされているのか？

(淡路) 65歳になるまでに入所される際は皆受け入れしている。65歳過ぎたら介護保険に切り替わるが、それまでに入ってもらっていればよしとしている。

(淡路) 虐待等の事件について、非常に大変なことが起こっているにもかかわらず「仕方がない」といった声が世間で聞かれることが未だにある。障がいのある方が施設ではなくグループホームやヘルパー利用などで地域で暮らせるようになればいいが、特に高齢の

障がいのある方については医療面も含めて地域で暮らすことが非常に難しい。看護師がグループホーム等で常駐していける予算等の支援が少ない。入所されている利用者は常に支援者が側にいるが地域で暮らす人も何かが起きた時に支援者が必要、そのような問題も出てきている。皆が地域で支えていかななくてはと言いつつも「最後は施設かししょうがないよな」という本音の声が聞かれる。それは様々な面で言える。非常に悩ましく思う。

【全体討議】

（司会者）特に討議課題の③（学力、進路等を保障するために何が壁になっているのか）について討議していけたらと思う。

（司会者1）就学前に障害のある子は各市町の教育支援委員会にかかり各幼稚園・保育所等に教育支援委員会が様子を見に行く。学齢期を迎える子どもの各家庭に就学前の健康診断の通知書が届く。この健康診断は発達を確かめるような内容である。この健診の結果を基に「この子は地域の学校は無理」と判断されてしまう。保護者が地域の学校に通わせたいと思っても叶わないことがある。障がいがあるがなかろうが地域の小学校に入学することができるということを大前提に考えるべき。そのために保護者と話をしていく。保護者が支援学校や支援学級を希望する場合も、そういう考えを持つようになった経緯・経過も知っておく必要がある。最近はや早い時期に診断がついてしまう傾向にある。「自閉症スペクトラム」と言っても幅広く、診断の根拠があいまいなことも多い。手帳を持っている、診断名がついている＝支援学校、支援学級ではないということを考えていかななくてはいけない。周りの大人が勝手に進路を決めていくのではなく、当事者の思いを汲み取り、その思いを大事にしていかななくてはいけない。日本でもインクルーシブ社会が問われるようになってきた。世界中の「障がい」のある人の声として、「自分たちを抜きに自分たちのことを決めるな」この言葉を原点としたい。

（司会者）あわじ市の中学校で10数名の野球部があった。試合に行くと騒いでいる子がいて皆驚いたが本人のまわりは何も驚いた様子なく普通の対応だった。その野球部は10数名にもかかわらず今年全国大会に行った。選手間の信頼関係、周りの人の、その「障がい」のある人に対する野球部の一員としての接し方を見ただけでチームの強さを感じた。

保護者に関しても子供が生まれてから様々な不安を抱え幾度の選択があったことが考えられる。（阪神）娘が小学校の時に支援学級を希望したが逆に断られた。「もっと大変な人がいるから」と言って断られたが軽度でも重度でもそれぞれに困り感はある家族が何も悩んでいないわけではない。小学生の時点で支援学級に入っていられただけで本人がしんどい思いをせず楽な道があったのではないかと感じる。希望しているのに支援が受けられない、教師の人手不足を理由にもされた。

（たつの）進路について視覚支援学校の先生を招いて小学生の視力を見てもらった際、中学校を普通学級に通い高校生になってから視覚支援の学校に来られる方がおられたが高校に入ってからまず点字を覚える事になった。中等部より入っていたら早くに点字を覚えられ職業訓練もスムーズにスタートができる。インクルーシブでありながらもその子本人の将来全体を専門機関でのサポートが必要な場合もある。それをうまく保護者に伝えてあげなくては学校、家族の都合等で本人の将来が決まってしまうこともある。

（淡路）40年前に障がいのある子を殺す事件があった。その際に加害者となった親に対して減刑運動が起こった。障がいのある人は「自分達は殺されてもいい存在なのか？生きている権利はないのか」と感じた。世の中の役に立つものは生きていてもいいが役に立たないものは生きている権利がないという優生思想が未だにある。障がいのある人の人権が守られた上で選択肢があるという基

本があるべき。みんな同じ土台の上において、その上で手厚くその人に応じた支援が受けられるべき。

(司会者1)学校のコーディネーターと教師、保護者が本人にあったカリキュラムを作成し本人も納得した上で、取り組む内容は違えど通常学級でも学習されるべき。支援学級に在籍することだけが支援を受ける手立てではないと感じる。

(司会者)様々な活動があるが関係箇所がひとつひとつ話し合いをして個人のケースを考えていかなければいけないと感じる。

2 総括と今後の課題

会場からの質問やそれに報告者が答えていく内容・流れを考えると、「共生社会」を実現させていくには、学校教育の段階からの「共生」が大切であることが分かる。特別支援学校での実践も、地域の公立小学校での取り組みも、福祉施設においてもそれぞれ立つ場は違うのだが、「障がい」のある子・人が学校・地域社会から排除されない・差別されないことをめざして、それぞれの場での取り組みの報告があった。特別支援学校の報告では「オペレッタ」を創りあげて、その参観等々を通じて、生徒たちの居住地校・近隣校との「交流」をはかり、近所の子どもたちに特別支援学校に来ている子どもの事を知ってもらう。地域の小学校の報告でも、子ども同士を「つなぐ」ことを大切にしていることが聞けた。もちろん「オペレッタ」を創りあげていく過程で当事者の子どもたちが、自信を持ち様々な成長・変化を見せてきたことも大きな成果であり、そのことを積み重ねながら、「共生社会」の実現に繋がっていくのではと考えさせられた。小学校の報告では、本校に在籍している「障がい」のある子はもちろん、「障がい者の事業所」との出会いを通して、様々な「障がい」のある人への思いを重ねていったことも伺えた。もちろん「障がい」のある子とそうでない子が一緒に学校生活を送り、同じ授業に参加している(教科やその内容によっては)とのこと、それらを通して、

地域の子どもたちとどう「つながって」いつているのかも考えさせられた。最近の「流行り」でもあるが、特別支援学校の子どもたちも、地域の学校の「障がい」のある子どもたちも、放課後に、学校や自宅の近所で友だちと一緒に遊ぶのではなく、「放課後等サービス」を利用する子(家庭)が増えている。つまり、放課後は「共に過ごす」ことがほとんどないという現実がある。夏休み等の「長期休業」中も同様らしい。様々な子どもたちが、地域で「共に過ごす」ことが難しくなっている。こうした現況を考えると、ますます「学校」という場での「共に過ごす」ことが大切になってくる。福祉法人「ぶったあ」の報告でも「差別と闘うためには、ずっと一緒にいること」とあった。福祉施設だけでなく、学校もそうでありたいと考える。小さい頃から、「障がい」の有無に関わらず、「時間と場」を共有し続けることこそが、「共生社会」を作り出すことに繋がると考える。